舞踊学会第 20 回定例研究会

若手研究者によるシンポジウム

「アジアにおける伝統の再創造と再構築」概要報告

第20回定例研究会の特別プログラムとして，標記のシンポジウムを開催しました。その概要を報告いたします。

日時：2015年６月７日（日）14：05〜16：55

会場：日本大学芸術学部江古田校舎

《プログラム》　司会：川島 京子（早稲田大学）

第一部　報告 1　竹村 嘉晃（人間文化研究機構 地域研究推進センター）

報告 2　木村 理子（東京外国語大学）

報告 3　波照間 永子（明治大学）

討論　竹村＋木村＋波照間＋川島（司会）

第二部　報告 4　高橋 京子（フェリス女学院大学）

報告 5　岩澤 孝子（北海道教育大学）

討論　高橋＋岩澤＋竹村＋木村＋波照間＋川島（司会）

【企画趣旨】

このシンポジウムには三つの狙いがあります。

一つめは「伝統」という語の概念について見つめ直すことです。文化人類学者の青木保氏は「「伝統」ということばは，歴史学においては常用される一般的な用語であろうが，人類学では「伝統」なることばは，それほど一般的ではない。」（『創られた伝統』所収 解説「「伝統」と「文化」」）と述べておられます。いま，「伝統」という語はどのように用いられているのでしょうか。

いっぽうで，舞踊や身体表現，芸能の分野では文化人類学，舞踊学的動作研究，舞踊史研究の各立場からの研究が活発になっています。二つめは「伝統」を軸にした学際研究を見据え，各研究方法の根底にある基本的な考えや傾向に触れていただきます。

三つめは近現代史において我々は「伝統」とどのように向き合ってきたのでしょうか。ことに不幸な歴史を背負うアジア諸国を事例に精鋭の若手研究者が最新の研究テーマに基づき，「伝統」が直面している課題や将来の展開について鋭く斬り込みます。　（文責：丸茂 美恵子）

【全体報告】

本シンポジウムは，上記のような企画趣旨の下，アジアの舞踊を研究対象としている現在活躍中の若手研究者を結集し開催された。

各氏からは，「アジアにおける伝統の再創造と再構築」というテーマに基づき，それぞれのフィールドワークを通して考察された最新の調査報告が披露された。

第一部は，主に文化人類学の立場から三氏。竹村嘉晃氏からは，「『伝統』を支える多元性－シンガポールにおけるインド舞踊の発展と移民・国家・多文化主義」というタイトルで，インドの舞踊文化がシンガポールにおいて「ナショナルなもの」と位置付けられていく過程と，現代社会における伝統を支える多元的な位相について報告された。続く，木村理子氏は，「民主化後の『伝統文化』の継承－モンゴルのチャム・ダンスを事例として－」というタイトルで，モンゴル伝統舞踊チャムの変容から見た社会主義政策による「伝統」の創造と継承の問題について，報告。続く，波照間永子氏「『男芸』（女形）から『女芸』へ－女性舞踊家のオーラル・ヒストリー－」では，琉球舞踊において「女芸」が成立・展開する過程が，①米国統治下の文化政策，②メディアによる文化復興運動（コンクールと「型」の研究会），③沖縄県立芸術大学の組踊・舞踊実習，④国立劇場おきなわ研修制度，⑤琉球舞踊保存会（国指定重要無文化財指定）伝承者研修制度と絡めて考察された。

そして，第一部の質疑を挟み，第二部は，舞踊学的動作研究の立場から二氏が登壇。高橋京子氏は，「インドの『伝統的な』マーシャルアーツ，カラリパヤットをめぐる現状」として，カラリパヤットの世界的な広がりと新たな解釈について実践者の立場から報告。最後に，岩澤孝子氏より「ピチェ・クランチェンとタイのコンテンポラリーダンス」というタイトルで，自国の古典／伝統舞踊が主流とされるタイの舞踊界において，伝統舞踊を再解釈し現代に活かす手法としてのコンテンポラリーダンスの可能性について，ピチェ・クランチェンの作品を通じて考察・報告された。

続く全体討議，質疑応答でも活発な議論が交わされ，昨今，多くのアジアの芸術と触れる機会に恵まれる中で，「伝統」という定義自体を問い直し，またその継承の問題を考える，まさにタイムリーなテーマであったといえよう。パネリスト各氏の講演内容の詳細と，討議および質疑応答の内容を，次ページより掲載する。

（文責：川島 京子）